

学会印象記

第16回国際エイズ会議に参加して

織田 幸子

Sachika ODA

独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター
HIV/AIDS 先端医療開発センター
HIV/AIDS 看護専門職

2006年8月13日、カナダ・トロントで開催された国際エイズ会議の参加者は、31,000人と過去最大数でした。出発の前日、爆弾テロ犯逮捕の報道があり、搭乗手続きが厳しく、デトロイトでの乗り換え時は、機内待機などもありましたが無事到着し、私達は会場の近くのホテルに滞在しました。トロント市内はとても穏やかな気候で、国際会議（HIVの問題が存在）が行われる所とは感じさせない、抜けるような青空がどこまでも広がっているという状況でした。ホテルから会場までは、徒歩で5分程度でしょうか、会場近くなると参加者達が集まって来て中に入って行くという、市内の規制も厳しいものはなかったように思います。

開会式は、ロジャーズセンターで行われ、先住民の踊りなどとカナダ政府、州政府、市の代表による歓迎の挨拶に加え、ICAAP（神戸）でもスピーチをした、フリッカ・チア・イスカンダールさん（彼女のスピーチは、「希望」を語り、約束を果たすことが出来ると）、UNAIDSのピーター・ピオット事務局長らのスピーチとビル&メリンダ・ゲイツ夫婦、リチャード・ギアらの基調講演などがあり、会場から拍手喝采を受け開会式は盛大に終わりました。

今回の会議のテーマは「Time to Deliver（約束を果たす時）」で、HIV感染の予防、治療、ケアを強調したものです。国連や世界の指導者達が「2010年までに治療・サービスへのユニバーサル・アクセスの実現にできる限り近づける」という構想の上に、各専門分野がそれぞれの立場から、HIV感染を防ぐことが明らかにされてきたエビデンスに基づく方法・治療・ケアのアクセスを拡大するためのさまざまな課題に対して実質的な解決策を提案できるよう戦略の重要性が強調されました。「CARAM—Asia 及び Migrant Forum in Asia」中での鶴田浩文さんは、しかし、同時に現状がこのまま維持されるのなら「HIV/AIDS対策を維持することは困難な状態にある、恐怖、広がるスティグマ・差別、暴力、ホモフォビアなども障害を作り続ける」と述べています。

2日目は、ジョナサン・マン追悼講演と HIV Pathogenesis, 疫学, 人権, 流行を拡大させる社会的要因などを含め、



HIV/AIDSの現状の総括。3日目は、予防分野における最新の研究とプログラム。そして、新薬、子供のHIV治療の先端、また、それらの普遍的アクセスの実現に向けてのパネルディスカッションと、エイズと貧困・開発との関係、宗教と政治の役割、若者達リーダーシップの重要性などに焦点をあてたパネルディスカッションなどが行われました。出国前に、会議のプログラムからどこに参加するかチェックをしてみました。看護でここは是非という演題が見つからず、参加は、ドラッグと予防のセッションを中心にしました。大阪—全国的な傾向ではありますが—では感染者が依然と増え続けているため、予防対策が世界ではどうなっているのかを知っておきたかったからなのです。同時に大阪では薬物依存の問題も重複し対応に困難な現実があり、そちらへ興味を中心がいったのは当然のことでした。

各国の事情で問題はさまざまであり、いわゆる社会的弱者、例えば発展途上国の人々や貧困・難民・MSM、先住民、薬物使用者、セックスワーカーなどのセクシャル・ヘルス、リプロダクティブ・ヘルスの権利、なかでも女性少女の地位向上はHIV感染の流行への対応として重要であると会議のセッションで挙げられていました。

エイズの予防・治療に関する研究の成果も数件発表され



ており、なかでも興味深かったのは、微生物を消滅させるという薬剤で、WHO（世界保健機構）のノードスツラーム事務局長代行は「微生物を消滅させる女性用のエイズ予防薬剤による新しい予防・治療法の開発に多くの資金を投入すべき」と述べていました。

「2016年のエイズをエビデンスベースで予測」の中でポール・ホルバーディング博士は過去の20年の経験に加え、これからの数年・数十年を考えると、「医療の中心は生活習慣病を抱えた高齢患者の治療が主になっていくことは習知のことである。プライマリケア領域でのHIVケアの実施、他の慢性疾患のように、専門家（セカンダリア、

ターシャリケア）と一般総合内科、かかりつけ医（プライマリケア）が共同管理していく形になるであろう」と述べている。かかるコストを考えると、やはり感染者を増やさない予防対策は、是非確実な方法をとる述べていました。会場内、市内各地で開催された、イベントの感染者当事者の主催と協力者との協賛で行われたものもありました。コマースセックスワーカー、アフリカの女性の支援団体、ラジオ局のブース、デモンストレーションを通して、積極的なアピールなどあり、逆に元気をもらえたという、活気の満ちた場面もありました。それは、トロント市にとけ込んでいたように感じました。